



日本語におけるリズム・アクセントの「ゆれ」と音韻・形態構造

田中, 真一

(Degree)

博士 (文学)

(Date of Degree)

2006-03-25

(Resource Type)

doctoral thesis

(Report Number)

甲3515

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/D1003515>

※ 当コンテンツは神戸大学の学術成果です。無断複製・不正使用等を禁じます。著作権法で認められている範囲内で、適切にご利用ください。



【 2 】

氏 名・(本 籍) 田中 真一 (大阪府)

博士の専攻分野の名称 博士(文学)

学 位 記 番 号 博い第17号

学位授与の 要 件 学位規則第5条第1項該当

学位授与の 日 付 平成13年3月25日

【 学位論文題目 】

日本語におけるリズム・アクセントの「ゆれ」と音韻・形態構造

審 査 委 員

主 査 教 授 窪 蘭 晴 夫
教 授 松 本 曜
助教授 林 良子

要旨

本研究は、日本語（東京方言）のリズムとアクセントに関する「ゆれ」の現象を分析することを通して、そのメカニズムの解明を記述・理論両面から試みる。また、ゆれを生起させる複数の要因間の関係を提示し、個々の要因（制約）の一般言語学的意味を考察する。

研究方法として次の二点を目標とする。一つは、リズムやアクセントの一見規則性のないようにみえる現象を、言語データをもとに詳細に分析することによって一般化することであり、もう一つは、それらの一般化によって得られた規則（制約）の他言語との対照を通して、日本語が言語一般においてどのような特徴を有するのかを提示することである。

言語資料（コーパス）として、川柳の字余り、野球声援、歌謡の音符付与、アクセント辞典（外来語アクセント）などを用い、また、フィールド・ワーク的なものとして、複合語に関するアクセント調査を東京方言話者を対象に行う。これらの資料・調査によって得られたデータ分析により、各音韻現象に関わる規則性を提示するとともに、規則間の相互関係および意味を考察する。

また、上記のデータをもとに得られた規則を、一般言語学的な観点から捉え、日本語にみられる種々の音韻現象が、系統の異なる他言語においても同様に観察されることを指摘し、その上で、日本語の個別性と普遍性を論じる。

日本語と言語一般との関わりを示す試みの一つとして、最適性理論（Optimality Theory ; Prince & Smolensky 1993）の枠組みによる外来語アクセントの分析を行う。分析によりアクセント付与に関与する種々の制約間の関係を提示した上で、日本語と他言語との共通性を示し、日本語のアクセント付与方策における一般言語学的な意味を論じる。また、OTの制約群の一つであり、単語内の（フット）位置を算定する Alignment 制約が、語の長さによって異なる反応を示すことを外来語、複合語のアクセント分析によって示すとともに、そのようなアクセント付与方策の違いが、日本語における音韻作用域の境界といわれる、4 モーラと 5 モーラとの間に存在することを指摘する。

また、位置的忠実性（Positional Faithfulness ; Beckman 1998, 2003）と呼ばれる、位置に関する制約の観点から音節とモーラの関係を分析する。データの分析から、初頭要素においては特殊モーラの自立性が自立モーラと同様に保たれ、モーラ性が保持されるのに対し、末尾要素においてはその自立性が低下し音節量が中和されることによって、音節性が相対的に高まることを指摘する。

さらに、従来日本語の分析のみに用いられてきた「特殊モーラの階層」という概念を、ソノリティーにもとづく音節形成の階層という、言語一般の概念によって捉え直すことにより、記述的説明の妥当性を高めるとともに、日本語の特殊モーラに関わる種々の現象を、言語一般との関連の中で捉え直すことを試みる。

上記をはじめとするさまざまな分析を通して、日本語の音韻現象と他言語との関係を論じる。

本論文は、関連する 6 つの章から成る。

まず、第 1 章において、本研究の目的および全体の構成を述べ、さらに研究に関わる従来の知見を概述する。

第 2 章では、日本語において重要な役割を担う「モーラ」と「音節」との関わりを、川柳の字余り、野球声援のリズム、歌謡曲への音符付与などの統計的なデータ分析を通して

論じる。両者の生起を、とくに生起位置、単語長、語種（形態構造）などの観点によって分析し、それぞれの観点において基本的な（優先的な）構造の場合にはモーラが、周辺の（非優先的な）構造には音節が生起しやすいことを指摘する。また、これに関連して、日本語の音節とモーラをめぐる諸現象と、位置的忠実性（Positional Faithfulness ; Beckman 1998, 2003）をはじめとする言語理論との関わりを論じる。

さらに、従来から指摘されている、日本語における 4 モーラと 5 モーラとの間の音韻作用の適用境界が、川柳の字余り、野球声援などのリズム現象においてもみられることを示す。このような音韻作用域の境界に関連し、Alignment 制約が、とくに野球声援において関係することを指摘した上で、続く第 3 章のアクセントの現象との関連性を述べる。

第 3 章では、音節を介した「フット」にもとづく外来語アクセントの一般化を、記述および理論両面から試みる。記述的には、第 2 章で論じた音節という概念によって外来語アクセントが一般化できることを、アクセント辞典に記載されたデータ分析にもとづき指摘するとともに、原語アクセントの継承や、モーラにもとづく分析といった、外来語アクセントに関する他の分析方法を、データ説明力と理論的整合性の面から否定する。

さらに、理論的には、最適性理論（Optimality Theory ; OT）の枠組みでアクセントの理論的一般化をもとに、他言語との対照を試みる。以上を通して、従来から指摘されている外来語アクセントにおける「一 3 規則」（語末から 3 モーラ目へのアクセント付与）が、「一 3」という位置そのものからではなく、種々の制約の相互作用の結果によって生起することを指摘する。

また、Alignment 制約との関係では、外来語アクセントに関し 5 モーラ以上の長い単語についてはアクセント位置算定がもっぱら語末から行われる（Align-R が強く関与する）のに対し、4 モーラ以下の短い語に対しては、語の前後両方からそれを測る（Align-L と Align-R の両方が関与する）ことを指摘し、その長さとして Alignment の方向性との関係が、前章で分析した野球声援との間に共通性のみられることを示す。

第 4 章では、第 2 ～ 3 章で論じた Alignment 制約と形態構造との関係に着目しながら、日本語アクセントの現象における音韻構造と形態構造の関係を論じる。第 3 章を踏まえ、（形態素境界のない）外来語において強力に作用した音韻構造（音節構造）が、その他の語種および語形成部門においても、程度の差こそあれ同様に作用することを確認する。その上で、複合語を含む形態素境界を有する語においては、音韻構造と形態構造の情報とが競合した形で出力（output）の得られることを指摘する。さらに、形態素境界の強度によってそこにアクセントが引きつけられる度合いが変化し、形態素の情報が強いほど、その境界へのアクセント付与が好まれ、それが弱いほど、音韻構造により依存したアクセント付与が行われやすくなることを示し、音韻構造と形態構造による情報とがそれぞれを補完する形で作用することを指摘する。

第 5 章では、従来から日本語の分析にのみ関係していた「特殊モーラの階層」という概念を、ソノリティー（sonority）という言語一般の基準によって捉え直すことにより、日本語を他言語と同じ土俵で扱うことを試みる。

音節核直後の要素のソノリティーによって音節の重さ（音節量）が決定されるという Gordon (2004) の提案を日本語に適用し、後部が促音や撥音といった、ソノリティーの低い要素からなる音節が重音節としてよりむしろ軽音節としてふるまう現象を、リズム、アクセントなどさまざまな言語的基準をもとに分析する。そして、一見不規則にみえる音韻現象が、促音などソノリティーの低い要素を含んだ音節を軽音節とみなすことによって一般化できることを指摘した上で、日本語における音節量にソノリティーが反映されていることを論じる。

最後に第 6 章において、本研究で扱った内容のまとめを確認し、本論文の結びとする。

論文審査の結果の要旨

氏 名	田 中 真 一	
論 文 題 目	日本語におけるリズム・アクセントの「ゆれ」と音韻・形態構造	
要 旨		
日本語のリズム、アクセントについては数多くの研究が報告されているが、それらのほとんどは、現象の中から典型的なリズム、アクセントのパターンを抽出し、そのパターンを作り出す規則を構築するというものであった。ところが、実際のデータを分析してみると、リズムやアクセントの現象には少なからぬ「ゆれ」が見られ、これまで提案されてきた規則では説明できない型が存在することがわかる。本論文は日本語（主に東京方言）の諸現象に見られるそのようなリズム・アクセントの「ゆれ」を統計的に分析し、その「ゆれ」が生じるメカニズムの考察を通して、日本語のリズムとアクセントの体系・規則を再構築しようとするものである。「音節構造」や「ソノリティー（音の聞こえ度）」といった一般言語学的な概念を日本語の記述に導入することにより、一方では広範囲な日本語のデータを一般化し、他方では一般言語学的視点から日本語の特性を明らかにしようとしている。 論文は6つの章からなる。第1章は序論であり、論文全体の目的、構成を述べた上で、先行研究を紹介している。「音節量」、「モーラ」、「ソノリティー」などの一般的概念を説明し、日本語の語彙層と音韻過程の関係を述べたのも、この章である。 第2章では、川柳の字余り、野球声援のリズム、歌謡曲における音符付与という三つの独立した現象の分析を通して日本語のリズム構造を考察している。一見すると関係のない三つの現象であるが、詳細に検討してみると、音節とモーラの役割に関して共通した特性が見られることがわかる。この議論から、語頭においてはモーラ性が、語末においては音節性が高くなるということと、4モーラと5モーラの間に明確な音韻的境界が存在するという事を明らかにし、それを日本語の特性と結論づけている。 第3章と第4章は主にアクセントの現象を論じている。まず第3章ではアクセント辞典に記載された外来語アクセントのデータを統計的に分析し、「モーラ」、「音節」、「フット」の役割を明らかにしながら、日本語のアクセント体系を分析している。記述的には、「モーラ」に加えて「音節」の概念を導入することにより、「ゆれ」を含むアクセントの広範囲な事実が説明できると主張する。理論的には、最適性理論という最新の音韻理論を援用し、その枠組みで日本語のアクセントがうまく分析できることを明らかにしている。一般音韻理論を用いて日本語を分析したことにより、日本語を他の自然言語と同じ土俵で比較することが可能となった。 第4章では主に複合名詞のアクセントを分析している。独自のアクセント調査により大量のデータを提示し、その統計分析によって日本語アクセントの基本的な事実を明らかにしている。複合語のアクセントを音節構造と形態構造に着目して分析することにより、アクセントの「ゆれ」を含む広範囲な事実が一般化できることを示している。また、複合語アクセントと第3章で論じた単純語アクセントに、共通した原理が働いていることを指摘した。 第5章は従来「特殊モーラ」という名前で分析されてきた諸現象を、「ソノリティー」という一般言語学的概念を用いて再分析したものである。同じ特殊モーラでありながら、たとえば促音（っ）と撥音（ん）がさまざまな音声現象で異なる振る舞いを見せることは以前よりある程度知られていた。この論文ではより広範囲な言語事実をもとに、特殊モーラの間に見られる振る舞いの違いが「ソノリティー」という一般的な概念によって捉えられ		
主 査 記 載 氏 名 ・ 印		窪 菌 晴 夫

ると主張する。また特殊モーラの中でも促音だけが特異な振る舞いを示し、それが日本語の特性であると解釈している。

第6章は全体のまとめであり、本論文が明らかにしたことを記述的な視点と理論的な視点の両面からまとめている。

本論文は、次の6つの点において言語学の研究に貢献している。まず第一に、日本語のアクセントとリズムに関する先行研究を十分に理解し、これまでの研究の問題点を明らかにしていること。第二に、これまで体系的に分析されていなかった諸現象に光を当て、独自の精緻な言語調査や辞書分析により、新たなデータを提示したこと。第三に、それぞれの現象を、音節構造、ソノリティー、フットなどの一般言語学的な概念を用いて分析し、優れた記述的一般化を得たこと。第四に、この分析により、一見関係ないように思える複数の現象が同じ原理に支配されていることを証明したこと。次に、音節構造やフットなどの一般言語学的な概念を用い、また一般音韻理論を踏まえて日本語のアクセント、リズムの現象を記述することにより、日本語の音声現象を他言語の現象と直接比較することを可能とし、日本語と他の言語との異同を明らかにしたこと。最後に、日本語の研究が一般言語学の発展にどのように貢献できるか、具体的に示したこと。以上が、本論文の優れた点である。

その一方で、本論文にはいくつかの問題点も指摘できる。たとえば、用語の定義がところどころ不十分であったり、言語事実とその解釈の間にとところどころ遊離が見られる。また、諸現象の分析が記述的一般化にとどまる傾向があり、得られた分析の背後にどのような原理が働いているのか考察が不足しているきらいがある。このような欠点が見られるのは確かであるが、それらを補うに余りあるほどの新しいデータと新しい知見が提示されており、本論文が日本語と一般言語学の研究に大きく貢献していることは明らかである。

以上の評価をもとに、本審査委員会は全員一致で、論文提出者・田中真一氏が博士（文学）の学位を授与されるに足る資質を有すると判断した。

審査委員

区 分	職 名	氏 名
主 査	教授	窪菌 晴夫
副 査	教授	松本 曜
副 査	助教授	林 良子